

昭和前期国定国語教科書にみられる人間関係

— 第四期（サクラ読本）から第五期（アサヒ読本）へ —

渡 辺 通 子

はじめに

本稿は、昭和戦前から戦中期までの昭和前期に刊行、使用された第四期及び第五期の国定国語教科書に、どのような人間関係が題材となっているかを調べるものである。これは筆者が取り組んでいる学制期以降の教科書に現れたコミュニケーション教育の特質を明らかにする教科書分析研究の一環に位置づけられる。一連の研究では、教科書教材に登場する人物の人間関係を調査することにより、それぞれの時代に、どのようなコミュニケーションのあり方が想定されていたのかを捉えることで、わが国の近代学校教育におけるコミュニケーション教育の生成と展開を跡づける。このことは、これまでの国語科の成果と問題点を明らかにすると共に、今後のコミュニケーション教育の課題を明らかにするものである。

なお本稿で用いるコミュニケーションとは、社会的文化的文脈における人間相互（主体と主体）の動的な関係というように考え

ている。人間関係の存在はコミュニケーションを成立させる前提であり、他者の存在を認めることで互いのかかわり合いが可能となる。他者とのかかわり合いを通して言語の運用能力を身につけ、社会性を備えていく。コミュニケーション教育とは、人間関係のあり方やその際の言語の運用能力を習得させるものである。

二 研究の対象と時代背景と教科書編纂

昭和前期には、国定第四期『小学国語読本』（通称サクラ読本、ここでは第四期と表記）と国定第五期（通称アサヒ読本、ここでは第五期と表記）の二冊の教科書が刊行、使用されている。

大正七年に刊行された国定第三期（『国定国語読本』をさし、ここでは国語と表記）が十五年の間、使用され、昭和に入つて思想や経済の変化に伴う教育界のめまぐるしい変化の中から要請された待望の教科書が第四期であった。それに対し第五期は、昭和六年の満州事変を契機に、次第に深刻化していった国際社会からの孤立化という非常時体制における皇国民養成のための抜本

的な教育改革の具現化としての教科書であった。どちらも大正十四～十五年に欧米留学をして国語指導の実地を見、最も進んだ編修の国語教科書を調べ集めてきた井上赴を中心に編纂されたものである^四。井上は第四期に監修官として参加^五、第五期では図書館編修課長であった^六。第四期はこの留学の収穫による産物といえる^七。

第四期では、著者自らがコペルニクスの転回とするセンチンス・メソッドを導入し、教材はドイツの「ハンザ・フィーベル」の影響を受けて、国語独自の立場を尊重しながら、なるべく言語、文学に限定し、その排列には児童の心理と生活とが重んじられた^八。当時、「時代錯誤的なもの」になりつつあった文語の扱いも「言語習得の一方法として反復法」をとる編修^九で効果的に機能させている。何よりも大きな特徴は、帰国後に携わった小学国画教科書の編修成果や心理学の援用を受けながら、子どもの心理的、生理的発達段階に配慮して、四期に分けた編修がなされたことである^{一〇}。即ち第一、二学年を知能の十分に発達しない未分化的な第一期、第三学年を知性の著しく目覚める、過渡的な第二期、第四～六学年を子どもの完成期である少年期時代として第三期、高等小学校を青年前期に当たる第四期とし、この発達段階に基づいて教材が排列されている。この編修方針は第五期にも受け継がれた。その意味では、『コトバノオケイコ』、『ことばのおけいこ』、『ヨミカタ』、『よみかた』、『初等科国語』から成る第五期の編成^{一一}は、第四期の方針を教科書上に完成させたものである。しかし、第五期編纂については、井上の回想^{一二}や「国民学校教科書二対ス

ル陸軍要望事項」なる資料が存在すること^{一四}から、軍部の圧力があつたことは明らかである。編纂者にとつては「おもしろくない事態」であり^{一五}、二本立ての編成は、国民学校令を機として国語に「話し方」が分科としておかれることになったのに乗じたものであつた^{一六}。第四期が六年まで出揃つたわずか三年後には第五期が刊行されており、第四期から第五期への経緯は戦時下へ向かう特殊な時代背景を抱えていたのである。

このような時代背景のもとで、子どもたちにはどのような人間関係のあり方や言語の運用が求められていったのだろうか。両読本について、人間関係の類型からみる特質を大正期と昭和前期の違いを眺めながらみていくことにする。教材本文中、複数の人物が登場し、その人物に主体としての行為がある文例、及び他者（相手）を想定した主体としての行為のあり方を示す文例（韻文は除く）を分析対象とした^{一七}。その際の人間関係に着目しながら分類し、その頻度数をまとめた。具体的文例については、話すことや聞くことといった具体的な言語活動にかかわる「言語」と、対他関係のあり方を示す「関係」の観点からその特徴を明らかにする。教材の引用の表記については、第四期をA、第五期をBとし、続いて巻と課数を示した。（第五期（アサヒ読本）については、一、二年までの「ヨミカタ」「よみかた」の場合は、ヨ一、三年以上の「初等科国語」の場合は「一」とした。）

三 人間関係からみる第四期と第五期の特徴

(一) 第四期（サクラ読本）にみる特質^一第三期から第四期へ

編者自らが新機軸の教科書を自負する第四期に対して、海後宗臣や仲新の一連の教科書研究における位置づけでは、いずれも満州事変後の社会情勢の影響を受けて国家主義的様相を帯びていることを指摘する。一方で、新教育運動の波のつた読本編修方法の加わった教科書¹⁶、世界的教育思想を端的に示したわが国の教科書史上画期的なものとして注目すべき教科書としている¹⁷。一方、唐澤富太郎は、文学教材の増加や挿絵の増加など編修技術の進歩は認めつつも、教科書を貫く中心思想がファシズムであり、その技術面は大正デモクラシーの余映として、超国家主義教育を強調し第五期の軍国主義への道を敷設したものである¹⁸。また国語教育の立場から西尾実は、今日という時代の教育界の望みを実現してくれた教科書と位置づけて一定の評価をしながらも児童文学読本の色彩で一貫していることの限界を指摘し、ことばの生活の具現化を求めた¹⁹。実際に第四期で学んだ藤富康子は『サクラ読本追想』(国土社、一九八五)で多彩な文学教材の採択をいうが、大岡信は「ああいうの(巻一の巻頭を指す 引用者注)は、つまり外をながめている子どもであつて、子どもは行動していないわけですよ。自分が固定した位置にいて、動いていく外界ないし変化する外界の状態をとらえていくのが昔の国語教科書における一年生の教科書の基本だと思ふのね(傍線部引用者注 以下同じ)」とその印象を語っている²⁰。大岡は、第四期が子どもの生活の足場を固定した位置に据え置き、行動させていないことを指摘する。西尾の言う「ことばの生活」がみられないということと大岡の「行動していない」という印象とは同じことを指している

のではないか。「行動していない」とは、人や物と主体的にかかわることがなく、生きて動く人間同士のコミュニケーションが成立していないことであり、山住正己の言を借りれば「自分の意志で行動を起こし、同時に相手に働きかけるのではなく、自分はいくまで固定した位置にいる」ことである²¹。西尾が言語活動領域に触れた教材として例示する大正期の教材「言ひにくい言葉」(『国読』10-17)は、友人間、父子間のコミュニケーションの葛藤場面を取り上げた現実の言語生活に即した教材であった²²。

ところで第四期は、大正期と比べた時、人間関係の類型の現れ方にどのような変化が見られるのだろうか。「表1」は、第四期と大正期「国読」の教材中に現れる主な類型とその頻度を示したものである。家族親族関係を中心しながら子供の社会化を図ろうとする編修は同じだが、家族親族は、28.3%↓26.0%と2.3%減少し、天皇を含めた君臣上下は、18.6%↓21.4%と2.8%増加して、その差は9.6%から4.6%と小さくなっている。頻度の高い順に並べ換えた「表2」からは、両読本の上位四位までの類型が全く同じであり、各類型の差は±0.7〜3.2で、殆ど違いはみられない。そこで2%以上の増減があったア 敵味方(±3.2%)、イ 君臣(±2.2%)、ウ 友人(±2.2%)の上位三位の類型について、教材の内容の上から検討をしてみると、次のような違いが認められる。

ア 敵味方関係と敵味方関係に現れた好戦性

敵味方関係は、天皇の祖先の古代における戦いぶり、源平の戦いを中心にした武士たちの勇ましい戦いぶり、日清、日露、満州事変の戦いの場面を取りあげた近代以降のものに分けられる。敵

味方関係は、まず『古事記』を出典とした教材(A66川上たける)に現れ、天皇の祖先が賊を倒す正義であることが強調される。続いて『平家物語』や『源平盛衰記』に材を採った源平の戦い(A313牛若丸・A610神風・A816くりから谷・A811ひよどり谷・A817扇の的・A818弓流し)が取りあげられて木曾義仲や源義経らの戦いぶりが描かれる。

大正期の敵味方関係は、戦いの勝利を叙述するものであったが、第四期では敵軍との戦いの具体的場面を取りあげた一死報国の好戦的な教材が現れる。日露戦争での日本海海戦の戦況(A1110日本海海戦)や敵飛行場爆撃計画による敵との空中戦の場面(A1127空中戦)、戦車部隊による戦いの場面(A1213機械化部隊)が、「新たな敵を求めて猛烈に撃ちまくる」「彼我人乱れての一大修羅場」が展開される(A1213機械化部隊)、「こしやく」「生意気な」「全弾命中。何といふ痛快さだ(A1127空中戦)」という表現で生き生きと描かれているが、ここでは攻撃する相手の人格は問題にされず、敵を倒すゲーム感覚に近い描き方となっている。

君臣関係と組織コミュニケーションの重視と忠の揺らぎ
 第四期の特徴として、君臣上下関係においては、個々人の一对一の関係よりも組織管理上の関係、即ち組織コミュニケーションが重視されていること、第二に、伝統的に重視されてきた「忠」に揺らぎがみられることが挙げられる。敵との戦いには、一騎打ちよりも大勢の家来(A411大江山・A418白倉基)や部下(A712兵衛たより・A9127橋中佐)を連れて戦う場面が増える。「A716木下藤吉郎」「短い槍と長い槍(一)(二)」では、上司である

【表1】大正期(国読)と第四期(サクラ読本)との類型別対照表 下段フックは% 小数点第二位は四捨五入、総計が100%となるよう処理した。

大正期 国読	家族親族						男女	天皇皇族			君臣上下		同僚	師弟	敵味方	売買	老若	外国	その他	総数
	親子	兄弟	夫婦	祖父母	親族			天皇	親族	外国	君臣	上官								
7.1	3.04						3.4	4.3			15.7		3.7	3.2	7.3	1.7	2.1	6.8	2.19	3.2
6.6	28.3						3.2	4.0			14.6		3.4	3.0	6.8	1.6	1.9	6.3	20.3	3.0
	1.5	5.6	5.8	3.0	2.6	3.4	2.7	0	1.6	8.6	7.1	2.5	0	1.5	8.0	6.6				1076
	14.5	5.4	2.8	2.4	3.2		2.5	0	1.5	8.0	6.6									
第四期 サクラ読本	3.50						5.7	7.4			2.16		5.1	3.8	1.3	3.3	—	8.4	2.5	5.3
4.4	26.0						4.2	5.4			16.0		3.8	2.8	10.0	2.4		6.2	18.8	
	1.7	3	8.6	3.9	5.3		5.3	2.1	0	13.8	7.8	3.9	1.5	0	10.2	5.8				1354
	12.3	6.4	2.9	3.9			3.9	1.5	0	10.2	5.8									

国読、サクラ読本共 巻1は謀が無表示のためカウントしない。サクラ読本祖父母類型は親族に、老若類型はその他に含めた。

【表2】類型順位(大正期「国読」と第四期)

順位	大正期		昭和戦前期	
	国読	第四期	国読	第四期
1	その他	20.3	その他	18.8
2	親子	14.5	親子	12.8
3	君臣	8.0	君臣	10.2
4	敵味方	6.8	敵味方	10.0
5	友人	6.6	兄弟	6.4
6	上官	6.6	外国	6.2
7	外国	6.3	上官	5.8
8	兄弟	5.4	友人	4.4
9	同僚	3.4	天皇	3.9
10	親族	3.2	親族	3.9

水は「五十人の中間に、一信長が家来に「一体、槍は長い方がよいか、それとも短い方がよいか」と尋ねる。それに対し上島主水と藤吉郎とで意見の対立がある。同僚同士の見解の対立があった場合、その上司が決着をつけるのが従来の教科書にみられる一般的なスタイルであった」(5)。しかし、信長は自身が「長い槍が好きである」ことは口に出さない。二人に議論をさせた後で、五〇人の中間を貸して三日後に槍の仕合で実証するように命じた。ここでは議論による論理的な決着よりも結果(実証)が重視される。その間、主

人々々」、「檣の使ひ方」を「教へたて」る。一方の藤吉郎の間
は、隊を組んで組織として行動することを稽古し、「三日程たつと、
三つの隊は、糸にでも引かれるやうに、藤吉郎の心のま、に動く
やうになつた」。仕合は「二せいに進む木下軍に追ひつめられ、
五十人はばらばら」の「上島軍はさんざんに破れた」。このよう
に、個人よりも組織としてのコミュニケーション行動を重視する
考え方は、「A7-12兵営だより」「A9-8軍艦生活の朝」「A10-
13久田船長」にも現れており、そこでは軍隊を「一つの大きな家
庭」とみなして号令に従つたり、沈没する船の乗員が船長の命令
に従つて義務と務めを全うしている。

また第四期には、家臣として忠を貴く伝統的な観念の教材（A
9-10松平信綱の幼時・A12-11島居勝齋）が採択される一方で、「A4
-18百合若」のような上下関係の逆転を描いたものがある。天皇
の命で外国と戦つて勝利を取めた百合若は、その部下である雲太
郎・雨太郎兄弟に地位を逆転される。戦いを終えて疲れのた
め寝入つてしまつた百合若に対して「ふとわるい心をおこし、百
合若を鳥におきざりにして自分たちが、大将にならうとかんがへ」
た兄弟は、帰国して天皇に虚偽の報告をして「思ひ通り大将とな
り、百合若のみた、りつばな城に住んでいばつてゐる。結末で
は勲善懲悪が賞かれるものの、これまでにはない内容である。

ウ 友人関係と師弟関係と連動した友人関係

第四期に現れる友人関係は、学校生活がその交友の中心の場と
なるため、師弟関係と連動して現れることが多い。遠足（A5-1
遠足）や登山（A11-9燕岳に登る）、芋掘り（A9-14いも堀）、スキ

1（A8-6スキ）など学校生活における行事を中心とした友人
関係が師弟関係と共に描かれる。また図書館や水族館など学校以
外の学びの場が提示され、学校は知を与えることよりも行事を通
して精神を養う場となる。

友人関係には科学的知の発見のためのコミュニケーションの葛
藤例が示される。「A4-7月と雲」では、雲が走るのか月が走る
のかを「たがひにいひはる子どもたちに、一人の子どもが木の
枝の間から見ることで実証する。また「A7-8木の高さ」では、
学校にある杉の木の高さの計測を互いに考えあぐねるが、一人の
子どもが影を利用することで実証する。生活言語よりもむしろ科
学知が重視されている点で大正期とは異なる。

(二) 第五期（アサヒ読本）にみる特質と第四期から第五期へ

戦時下という特異な状況下で編修された第五期に対し唐澤は、
編修技術は例外としながら、侵略戦争を是認して国民に滅私奉公
させるために神国観と八紘為宇のイデオロギーの強化とを例証と
する知識を付与した超国家主義・ミリタリズムの教科書とする。⁵⁶
実際に第五期で学んだという田近洵一は「少国民としてしっかり
した自覚を持たねばならないことをさとされた記憶がある。（略）
戦争ごっこばかりやつて「天皇陛下万歳」を叫んで見事に倒れて
はいたが、一人になると戦争に行くのはこわかつた。国語教科書
の古典的教材の勇壮なる文体は習い性となり、悲しい習性として
今日にまでつきまといつてゐる」と回想し、その解説では神国観と
八紘為宇の思想教育がなされた教科書と捉え、教科書文章の感化

性に敷衍する¹⁵⁾。

海後¹⁶⁾や仲¹⁵⁾は、編修方法は従来の方法を集大成したもので、国家主義的、軍事的色彩を濃くした戦時下特有の特徴を持ちながらも、国語教育を「ことばの教育」としてとらえて話しことばを重視した点を大きな変革としている。西尾は、戦時中の日本諸学振興委員会における発言でも、戦後も一貫して「文学的な国語教育に止まるのではなく日常生活における生活の断片の表現ともいふべきものに進んできた」とし¹⁷⁾、文学的発想から日常生活的発想に転じようとした教科書という見解を示している。「国語教育史資料」解説もまた戦後、言語生活指導を重視する方向へと大きく展開するための要因をすでに内包していた教科書ととらえる¹⁸⁾。先行研究にみられる評価の違いは、戦時体制下の思想教育を時代の付加とみなして捨象するかしないかの違いによるものであろう。

【表3】に、第四期と第五期の教材中に現れる主な類型とその頻度数を示した。大正期の教科書からは、数値からも家族を「祖父母」「父母」「子」の三世代を成員とした大家族とみなすことがみてとれたが、両読本では、祖父母類型が減少して第四期0.8%、第五期1.2%となり、父母とその子を中心とした家族が示されるようになる。昭和十二年に文部省から刊行され配布された『国体の本義』では、一大家族国家観を前面に出し、家とは親子一家だけでなく、遠き祖先から子孫へと継続されるものとされるが¹⁹⁾、国語教科書では必ずしも忠実に実現されていないといえよう。

【表4】は頻度の高い類型順に並べ換えたものである。両読本

【表3】第四期(サクラ読本)と第五期(アサヒ読本)との類型別対照表 下段ゴシックは小点数第二位は四捨五入、総計が100%となるよう処理した。

期	友人	家族親族				男女	天皇皇族			君臣上下		同僚	師弟	敵味方	売買	外国	その他	総数
		親子	兄弟	夫婦	親族		天皇	親族	外国	君臣	上官下官							
第四期 サクラ読本	5.9	3.50 26.0				5.7	7.4 5.4			2.16 16.0		5.1	3.8	1.36	3.3	8.4	2.55	1354
	4.4	親子	兄弟	夫婦	親族	天皇	親族	外国	君臣	上官下官	3.8	2.8	10.0	2.4	6.2	18.8		
		1.7	8.6	3.9	5.3	5.3	2.1	0	1.38	7.8								
		12.8	6.4	2.9	3.9	3.9	1.5	0	10.2	5.8								
第五期 アサヒ読本	1.5	3.95 24.7				4.2	9.6 6.0			2.45 15.3		1.7	4.3	1.69	1.1	6.0	2.17	1603
	9.6	親子	兄弟	夫婦	親族	天皇	親族	外国	君臣	上官下官	10.7	2.7	10.5	0.7	3.7	13.5		
		2.0	9.7	2.7	6.4	6.7	2.5	4	1.70	7.5								
		12.9	6.1	1.7	4.0	4.2	1.6	0.2	10.6	4.7								

サクラ読本第1、アサヒ読本「よみかた 巻1」は讀が無表示のためカウントしない。祖父母類型(サクラ読本11.8%、アサヒ読本20.12%)は親族に含めた。

【表4】類型順位(第四期と第五期)

順位	昭和戦前期			
	サクラ読本		アサヒ読本	
1	その他	18.8	その他	13.5
2	親子	12.8	親子	12.9
3	君臣	10.2	同僚	10.7
4	敵味方	10.0	君臣	10.6
5	兄弟	6.4	敵味方	10.5
6	外国	6.2	友人	9.6
7	上官下官	5.8	兄弟	6.1
8	友人	4.4	上官下官	4.7
9	男女	4.2	天皇	4.2
10	天皇	3.9	親族	4.0
	親族	3.9		

の各類型の差は±0.1〜6.9である。両読本を比べると順位に入替えがあり、第五期になると同僚(6.9%)、友人(5.2%)に増加傾向がみられ、家族以外の関係が重視されるようになる。また天皇を含めた君臣上下について、国読↓第四期↓第五期への変化を見ると、天皇(2.5↓3.9↓4.2%)、皇族(0↓1.5↓1.6%)、君臣(8.0↓10.2↓10.6%)は微増を続けている。逆に上官下官(6.6↓5.8↓4.7%)は減少している。第五期では国家主義・軍事主義的教材が多く採択されて、天皇や皇族の地位の明確化と共に、軍隊を中心とした現代的な上下関係より

も忠孝を基礎とした武士の上下関係が採り上げられたためである。

同じように、家族親族関係と天皇を含めた君臣上下関係との差をみていくと、国読で9.7%であったものが第四期では4.6%、第五期では3.4%とさらに差は縮まる。家族親族関係と天皇を含めた君臣上下関係の現れが接近していることは昭和前期の大きな特徴である。これらの関係は教材中でのように描かれているのだろうか。そこで、さらに親子関係を父子と母子の類型に分け、傾向を調べたのが「表5」である。明治期より、教育を含めた家政は母の仕事とされてはきたが、教科書に現れる頻度数は父子関係が母子関係を上回っていた。明治以来、教科書中では父子関係が母子関係より重視されて描かれていたといえよう。しかし、昭和前期を境にこの関係は逆転する。第五期からは、母子関係が父子関係を上回るようになる。第五期で増加した同僚、友人関係がどのように描かれているのか、また母子関係重視への転換がどのように描かれているのか、教材をみていこう。

ア 同僚関係と組織コミュニケーションの具体としての同僚関係

第四期の君臣上下関係にみられた組織コミュニケーションの重視は、第五期で同僚関係の現れを増加させた。組織としてのコミュニケーションが一層重視され、それは軍隊における組織の成員としての同僚同士の集団行動を中心に描かれる。「みんな心を合はせて、一生けんめい、たふれるまでこいだり（B118カッターの競争）」、「三人の心は、持った一本の破壊筒を通じて、一つにな（B21三勇士）」って攻撃する。「千何百人の乗員は号令に従つて

規律正しく活動（B519軍艦生活の朝）」し「突込め」の命令で集団で隊を組んで攻撃する（B610不沈艦の最期）。

イ 友人関係と「ごっこ」遊びの意味

友人関係の現れ方は第四期と同様で、師弟関係と連動して現れる。学校生活における行事は、第四期との共通教材（B713燕苗に登る・B416山のスキー場）に加えて、遠泳（B515遠泳）や敵味方で競う雪合戦（B216雪合戦）があり、集団行動が重視されている。

第四期で友人同士のコミュニケーションの葛藤場面のみられた「A47月の雲」は削除され、「A718木の高さ」は新たに「B314国旗掲揚台」として葛藤のない劇化教材となっている。また低学年では、郵便ごっこ（Bヨ414）、兵隊ごっこ（Bヨ216）、

【表5】親子関係の内父母の占める割合

期 類型	明治期		大正期		昭和戦前期		戦後期
	第一期	第二期	第三期 尋読	第三期 国読	第四期	第五期	第六期
父子	55.6	45.2	49.2	57.7	49.7	44.9	44.2
母子	37.0	40.5	47.7	35.9	46.8	52.2	54.7

合計が100%にならないのは父母を特定できない関係があるためである。

医者ごっこ（Bヨ211）、電車ごっこ（Bヨ212）の友人同士での「ごっこ遊び」が増えており、子どもに疑似的な社会化体験をさせている。国民学校期の国語教育の推進者の一人であった田中豊太郎（東京師範学校訓導）はこれらの取扱いについて、「国語そのもの、ことばそのものについて確かな理會を与へ、自覚の上に立つて国語生活をさせやうとする」ための「ことばの修練であり、繰り返さして習慣づけてしまふ、理屈抜きに、直接に、子どもに口に乗ける」ものであると解説している^{三四}。国語生活

(戦後使われる言語生活と同じかどうかわからないが、生活言語の教育を重視する現れとみて取れよう)が意識されているもの、こ
とばの修練や躰が重視されており、子どもは言語行動の主体とし
て認められていないのである。

ウ 母子関係と母子間の精神的な結びつき

〔表6〕に示した母子関係を探り上げた教材をみていくと、両
読本とも低学年用では母は父に比べ、子どもに妹弟の世話(A2
7・B20213ケンチャン・B212補列)や買物(A213アシタハ
エソク・B212アシタハウンドウクワイ)の用事を言いつけたり、子
どもの外出や帰宅の許可をしたりする(A518・B116夏の午後・
A723お月見)など日常生活の細やかな場面での子どもとのわか
わりがみられる。そして「えらい(A619・B212僕の望遠鏡)」「
じやうず(A3116かちかち山・B3122うさぎとたぬき)」とよくほ
める。

高学年用には共通教材「A1015・B612水兵の母」と「A10
14・B819母の力」がある。前者は明治期からの継続教材で、
戦地の我が子に「一命を捨てて君のご恩に報」いて「あつぱれな
るでがら」をたてて欲しいという「母の心願」を手紙に託す内容
である。後者は悪漢に襲われ深手を負った我が子が安楽死させら
れようとするのを「さあ、切るなら、この母もろとも切つてお
くれ」と「母の一念」で救う話である。田中の解説によれば、
二つの教材を対照して、前者は「自分の子供に死ねと言つてある」
が、後者は「自分の子供の命を命にかへても助けやうとしてある」
ものであり、「どちらも母の深い愛であり、子供を大きく生かさ

うとする心には変りはない」ことを理解させたいとする^{三三}我が
子を生かすも殺すも親の愛情だとする見解である。「水兵の母」
のような形で、母が我が子の生死についてまでかわろうとする
教材は、第五期になるとさらに増える。

「B712永久王」では、母宮は永久王の出征に際して「永久
のからだは、お上におささげ申したものですから、決死の覚悟で、
ご奉公なさるやうに」と語る。また直接戦争に取材した教材「B
619病院船へおかあさん」では、危篤の患者が最後に「満身
の力を込めて『おかあさん』とかすかな叫びをあげて」死んでい
く場面が描かれる。「何万の敵をもとせす、戦ひぬいた勇士
の頭に、最後にひらめいたのが、二十何年いづくしみ育ててくれ
た、尊い母の姿」だったのである。監修官松田武夫は「水兵の母」

〔表6〕母子関係のみられる教材一覧

サクラ読本	アサヒ読本
2-3 アンタハエンソク	32-2 アンタハウンドウクワイ
2-7 ケンチャン★	32-3 オサバ
2-10 ネズミノヨメリ★	32-13 ケンチャン★
3-8 どれい	32-17 ネズミノヨメリ★
3-10 蛙	32-18 ネズミ
3-16 かちかち山★	33-11 ひしほ
3-23 おはしほ	33-16 金魚(二)
3-24 浦島太郎	33-18 お祭
4-3 海軍のいさん★	33-20 岸(一梅+来C)(二砂の山)
4-13 いっぴん★	33-22 うさぎとたぬき★
4-14 ニイサンノ入営	33-25 印刷日の朝
4-17 豆まき★	34-11 海軍のいさん★
5-5 八岐のおろち★	34-11 嶺(おかあさん)
5-18 夏の午後★	34-14 いっぴん★
6-2 祭りに行く★	34-19 豆まき★
6-5 稲刈り★	34-19 八岐のおろち★
6-9 僕の望遠鏡★	1-16 夏の午後★
6-16 雪の夜	1-22 軍火利根(一)
6-18 火事★	2-2 稲刈り★
7-11 朝顔の日記	2-3 祭りに行く★
7-22 夕日	2-12 はくの望遠鏡★
7-26 乃木大将の幼年時代	2-13 火事★
8-7 万寿姫★	2-15 おんぼろ(寒い夜)
8-9 (二)大演習★	3-4 君が代少年
9-5 松下博尼★	3-11 出航
9-16 三日月の影(重代の母)★	4-8 万寿姫★
10-5 水兵の母★	4-11 大演習(一)(三)★
10-11 朝顔の田舎(二冬の夜)	4-22 母の日
10-14 母の力★	5-22 戦地の父から
10-22 開業の日	5-5 スレンパンの少女(二)(三)
10-26 「あじ」に乗りて	5-10 武士のおかあ(隠子張り)★
11-7 姉★	5-20 水兵の母★
12-25 雪国の春(せり積み)★	6-2 水兵の母★
	6-6-3 姿なき大蛇
	6-11 世界一の機械
	7-2 永久王(一)(三)(六)
	7-7 姉★
	7-17 いけ花
	8-9 母の力★
	8-12 帯水のぬれ(母の教へ)
	8-19 雪国の春(せり積み)★

★は共通教材、部分修正を含む
<>は朝文

が明治の軍国の母の姿であるとするならば、戦死した我が子を「いざ、今日よりは／母のふところに帰れて、／安らかに眠れ、／幼かりし時／わが乳房とすがりて、／すやすやと眠りしごとく。」と歌う「B6-3姿なき入城」は、昭和の軍国の母を書き現したものであるとする^{三〇}。

このように母と男子との関係はより重視され、母子の精神的な結びつきを通して、兵役を担う「ますらを」は作られていく。母の存在は、男子として生きるための精神的な拠り所となる。この母子一体の精神的結びつきは、子が男子として敵と戦うことを重視する。その根底には天皇への忠の重視がある。敵とは天皇の敵（賊軍）であり、「臣民として」、「御楯と起ちて」「たくましくををしく」天皇を守り（B6-3姿なき入城、敵に勝つことこそが忠なのである。ここで求められる天皇への忠は母子関係における一体感に通ずる。

四 昭和前期教科書に特徴的なコミュニケーション・スタイル

先に見てきたように、昭和前期教科書に特徴的な人間関係のあり方として、葛藤が生じた場合、上下関係による決着ばかりではなく実証を重視するスタイルや、母子関係にみられるような母が子を包含し一体化するようにして第三者とかかわるスタイルの現れがある。この外に、①面読本の共通教材である「A5-21天孫」と「B1-20にぎのみこと」や、②兄弟のコミュニケーションの葛藤を描いた第四期の「A5-25二つの玉」、③外国人とのコミ

ュニケーションの葛藤を描いた第五期の「B3-24濱田弥兵衛」にもこの期に特徴的な葛藤の解決のありようがみられる。

①に登場する天のうずめのみことは「しつかりした気性で、しかもへうきんなお方」で、天照大神に命ぜられて天孫（第五期では皇孫）が降臨する道を塞ぐ男の正体を探る。その時、恐ろしそうな男に対して「わざとこつけない様子をして（第四期）」「わざと、おどけたやうすをして（第五期）」笑う。意図的に剽軽に振る舞うことで相手との関係を切り結び、コミュニケーションの端緒を作っている。

②に登場する火遠理命^{ほのつるみこと}は、兄神火照命^{ほのてるみこと}から借りた釣針をなくしてしまい「いろいろおわび」をするが、兄神は「どうしてもおゆるしにな」らない。そこで自分の剣を砕いて五百本の釣針を作り「これをさし上げますから、ごかんべんを願ひます」と言つて詫びるが、それでも兄神は許さない。その後、数年をかけて海の神様の助けで元の釣り針を見つけてようやく許される。代替案を認めない頑ななスタイルが貫かれている。（第五期では「B1-24つりばりの行くへ」と改題され劇教材に修正、葛藤場面は四つの台詞に集約されている）③では、台湾との貿易を巡ってオランダ長官ノイツと日本人船長濱田の葛藤が描かれる。ノイツから不法な仕打ちを受ける濱田は、「不法な仕打ちに腹が立つて腹が立つて、たまらない」のだが、「できるだけおだやかに」度々かけ合う。だがノイツの「わうへい」な態度は変わらず、没収された武器や船具は戻らぬまま空しく月日を過ごす。「覚悟」を決めた濱田はノイツに「組みつき、しばりあげ」て「長い間だんばん」を続け、

漸く事は解決する。議論による解決が不可能の場合には暴力も辞さないというスタイルが示される。どちらも攻撃的 (aggressive) な解決のスタイルである。

五 第四期と第五期にみる言語観・言語教育観

(一) 第四期(サクラ読本)にみられる特質と言語の持つ精神性
第四期には、左記に示したような従来の教科書にはみられなかつた言語観・言語教育観を見ることが出来る。秋田喜三郎が言う「国語とは何か」という問いに対する¹⁾答が示されたといえよう。

- ① 国語を民族精神の精髓と見なし国際的拡大を目指している事
- ② 標準語教育が示されている事
- ③ 文字言語に優位性を置いている事

① この時期、日本語の使用は満州や米國、ブラジル、そして欧州にまで拡大する (A 8-4 大連だより・A 9-12 アメリカだより・A 10-26 「あじあ」に乗りて・A 12-18 欧州めぐり(イタリヤをめぐりて))。

第四期に採択され、第五期に継続された「A 9-28・B 8-20 国語の力」では、「われわれは、国語によつて話したり、考へたり、物事を学んだりして、日本人となる」のだとして、言語の働きが国民の育成と強く結びついていること、つまり、言語によつて日本人としてのアイデンティティを確立することが示される。「わが国語には、祖先以来の感情・精神がとけこんでをり、さうしてそれがまた今日の我々を結び附けて、国民として一身一体のやうにならしめてゐるのである」「国語は、かういふ風に、国家・国民と離すことの出来ないものである」とする。また「ことばを通

して古代日本人の精神をありありと読むことができ (A 11-12 占事記の話)、和歌には「国民の自分」「忠勇の心」「まことにををし精神 (A 12-15 万葉集)」が漲っているものだとする。

教材の内容からは、海外に居住する日本人のための言語教育 (A 8-4 大連だより・A 9-12 アメリカだより) と占領地政策としての言語教育 (A 10-6 南洋だより) (二) サイパン) の二つの観点がみられる。前者では、日本人の子どもたちが島民の子と区別されて、小学校へ通つたり (A 10-6 南洋だより) (二) サイパン)、日本語学校に通う (A 9-12 アメリカだより) 様子が示され、「日本人は日本語によつて教育されなければならない (A 9-28 国語の力)」とされる。後者では、島民の子どもが公学校で「上手に国語の対話や読本の朗読」等をする様子が書かれており、このことは第五期の教材で「大東亜戦争は、一面にことばの戦です。一たび占領地へはいれば、ことばが通じないかぎり、手も足も出ません。(B 5-15 スレンバン)の少女」と述べているように、ナシヨナリズムの確立にことばの教育が深くかわることを示している。

② この場合、「吉岡読本 (国定第一期を指す引用者注) が打ちたて芳賀読本 (国定第二期を指す同) によつて継承された標準語は、サクラ読本においても厳格に守ることにつとめました。八波読本 (国定第三期国語を指す同) には、表現のニュアンスのために、対話中、時に方言らしい言いまわしも用いてありますが、サクラ読本は絶対的にそういうものを排しました。」と井上が述べているように、²⁾ 全教材から方言は排除されており、大正期「国語」の流れを継承せずに、国定第一、二期にみられた標準語教育が重視

されている。

③その際には、日本語の正統性を『古事記』に求め、記録性を持つ点で文字言語が音声言語に勝ることを示し、「古語とは我が古代国民の精神がとけ込んである（A11-12古事記の語）」とし、言語とその精神性（A12-15万葉集）について述べる。静寛院宮が手紙によって徳川家を救った歴史的事例は（A12-26静寛院宮）、文字言語による表現の力について述べたものである。

（二）第五期（アサヒ読本）にみられる特質と言語の持つ伝達性

第四期に現れた言語観の三つの特質を示す教材は第五期で引き続き採択され、日本語を国際的に拡大させるという目的は、話しことばの教育の重視に発展する。第五期には第四期の教材を修正して劇化教材にしたものが多くみられる。

また第五期では、言語の持つ精神性を示すことに加えて新たに、言語の持つ伝達性が示されている。ことばと文字は「自分の気持ちを相手に伝える」役割を持っており、外国人との関係を例に、ことばや文字がわからない外国人であったら「決して心持が通じ合ふやうなことはありません（B5-7ことばと文字）」と述べる。そしてまた戦いの際には味方同士の伝達が必要であること（B2-7潜水艦・B4-23防空監視哨）、その方法は水兵・航空母艦・電信隊によって異なること（B3-10お話を述べる。これらは言語の持つ伝達性すなわちコミュニケーションの手段としての言語の役割を示したものである。「自分の思つてゐることを、話したり書いたりして、すつかり相手にわかつてもらつた時ほど、うれしい

ことばありません（B5-7ことばと文字）」と述べて、敬語の使用による相手意識の必要性（B7-4敬語の使い方）を示しているのは、関係性は固定化されるもののその具体化と言えよう。そのほかラジオについての教材（B3-24ラジオノコトバ、B3-22アンタハウンドウカイ、B1-17日記）が増え、マス・コミュニケーションが取りあげられるようになっていく。

戦後も引き続き教科書編纂に携わった石森延男は戦時中「国民学校の話し方」の中で、単なる話術のお稽古ではなく子どもの生活を導く話しことば教育を、「コトバノオケイコ」の活用を含めて意図していた⁵⁾と考えられるが、渋谷孝が指摘する「二本立ての教科書を持つ第五期にある言語観の矛盾⁶⁾」という表現に注目したい。言語の持つ伝達性を、言語の精神性を示す教材と一緒にどこまで表現することができたのだろうか。

六 おわりに

コミュニケーション教育にかかわる教材は、「聞く・話す」の音声言語そのものを直接学習するためのものと、読むことを通じて行われる教材とがある。第四期ではコミュニケーションの葛藤場面が描かれ、後者に属した教材が、第五期ではシナリオ風に書き換えられ劇教材となつて前者に属するようになる。これらの教材が対他関係を切り結びつづ行動することよりも、嫉と認識され、大きくはつきりした声を出して感情を込めて話すことに重点が置かれるのなら、それは音声言語活動を重視したパフォーマンスの教材とはなるが、コミュニケーション行動の主体の確立を促すコ

ミニユニケーション教材とはならない。

仮説的な類型を設定し、教材の内容に分析を加えたが恣意性は否めない。今後さらに検証を進め、見直しを図りたい。また第五期では、言語の持つ伝達性が初めて教科書に示されたが、この言語観が教科書教材にどのように反映されているのか、話しことばの教育についての検討はできず、現れた言語観を示すのみとなった。課題としたい。

注

一 教科書が受容者に与える影響を明らかにした先行研究には、先駆的な唐澤富太郎「教科書の歴史」(創文社 一九五九)や教育学の立場から片岡徳雄を中心とする「教科書の社会学的研究」(福村出版 一九七七)がある。

二 渡辺通子「国語教科書にみられるミニユニケーション・スタイル」田中本と榎原本の比較」全国大学国語教育学会「国語科教育第四七集」二〇〇〇。六五―七三頁。

三 尾形裕康「日本教育通史研究」早稲田大学出版部、一九八〇、二八八頁。

四 井上起著・古田東朔編「国定教科書編集 十五年」武蔵野書院 一九八四、三二頁。

五 図書局長柴田徹心、発行課長青木存義と監修官佐野保太郎、大岡保三、井上起、各務虎雄によって編修。昭和八年から十三年までの六年間、各学年ごとに発刊され、使用された。各巻の発刊年と使用学年は、次の通りである。

巻一	昭和八年	一年	巻五	昭和十年	三年	巻九	昭和十二年	五年
巻二	昭和八年	一年	巻六	昭和十年	三年	巻十	昭和十二年	五年
巻三	昭和九年	二年	巻七	昭和十一年	四年	巻十一	昭和十三年	六年
巻四	昭和九年	二年	巻八	昭和十一年	四年	巻十二	昭和十三年	六年

六 図書局編修課長井上起、監修官倉野憲司、石森延男、松田武夫によって編修された。初等科教科書は、昭和十六年四月に発刊、以後逐年一学年ずつ編纂し、十八年に完成、使用された。

七 注四に同じ。三二頁。

八 注四に同じ。三二―三三頁。

九 海後宗臣・仲新編著「近代日本教科書総説解説編」講談社、一九六五、一九八頁。

十 注四に同じ。四三―四四頁。

一一 心理学者の青木誠四郎、教育学者の篠原助一の名が上がつている。注六に同じ。三六―三七頁。

一二 各巻の発刊年と使用学年は、次の通りである。

ヨミカタ一	昭和十六年	一年	初等科国語一	昭和十七年	二年
ヨミカタ二	昭和十六年	一年	初等科国語二	昭和十七年	二年
コトバノオケイコ一	昭和十六年	一年	初等科国語三	昭和十七年	四年
コトバノオケイコ二	昭和十六年	一年	初等科国語四	昭和十七年	四年
よみかた三	昭和十六年	一年	初等科国語五	昭和十七年	五年
よみかた四	昭和十六年	一年	初等科国語六	昭和十八年	五年
ことばのおけいこ三	昭和十六年	二年	初等科国語七	昭和十八年	六年
ことばのおけいこ四	昭和十六年	二年	初等科国語八	昭和十八年	六年

一三 注六に同じ。一一〇頁。

一四 山住正己「国民学校の成立と教科書」『複製国定教科書(国民学校期)解説』ほるぶ出版、一九八二、五七―七一頁。

一五 注四に同じ。一一〇頁。

一六 注四に同じ。一一一頁。

一七 本文は、第四期(サクラ読本)は「日本教科書大系 国語(四)」講談社、一九六三、五五八〜七二二頁と「同 国語(五)」講談社、一九六三、六〜二五八頁、第五期(アサヒ読本)は「同 国語(五)」講談社、一九六三、二六〇〜七〇九頁による。

一八 社史編集委員会「近代教科書の変遷」東京書籍、一九八〇、二八〇〜二八一頁。

一九 仲新「教科書」文部省調査局編「文部時報」日本の教育九〇年」第一〇二号、帝国地方行政学会、一九六二、七三頁下。

二〇 唐澤富太郎「教科書の歴史」創文社、一九五九、四三〜四八〇頁。
二一 西尾実「言語教育と文学教育」武蔵野書院、一九五〇、一八五〜一八六頁。

二二 「座談会「にはんご」を作ってみて」『新装版教育読本教科書』河出書房新社、一九八三、二〇八頁。(初出は「子どもの館」一九七八月月号)

二三 山住正己「日本における学校教科書の性格と役割」『教科書と教育』一九八一、日本評論社、十六下〜十七上。

二四 西尾実「国語教育の新領域」一九三九、岩波書店、三八〜三九頁。
二五 注二に同じ。七十頁。

二六 注一〇に同じ。五一四〜五三〇頁。

二七 田近洵「国語」所収教科書の解説」注一四に同じ。九七〜一二二頁。
二八 注一八に同じ。二八二〜二八三頁。

二九 「所収解題」『日本教科書大系国語(四)』近代編第七巻、講談社、一九六三、七一〜七二頁。

三〇 西尾実「国語と国語教育」文部省教学局「日本語学研究报告第十二

篇」一九四三、二〇九頁。

三一 注二に同じ。一八六頁。

三二 「国語教育史資料第二巻」東京法令出版、一九八一、十四〜十五頁。

三三 「国体の本義」文部省、一九三七、四四頁。

三四 文部省「国民学校五・六年教科書編纂趣旨と取扱ひ方」日本放送出版協会、一九四四、一三六頁。

三五 注三四に同じ。一三六頁。

三六 注三四に同じ。六七頁。

三七 秋田喜三郎「初等教育国語教科書發達史」文化評論出版、一九七七。

三八 注四に同じ。五五頁。

三九 渋谷孝「石森延男」明治図書、一九九一、二二〜一三八頁。

四〇 注三九に同じ。四九九〜五〇三頁。

(県立多賀高等学校・茨城大学非常勤講師／
早稲田大学大学院教育学研究科在)